
イースター

鬼の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イースター

【Nコード】

N5387H

【作者名】

鬼の子

【あらすじ】

最新のAIロボット「イースター」彼は友好的な人を黄色で見え、敵対的な人を赤色で見ることが出来る機能を持っている。そんな彼の日記を見ていく。

2XX0年4／4

最新のAI機能を持ったロボットとして僕は生まれた。

でも、まだ僕の本体は頭だけ。

名前は生まれた日に、ちなんで「イースター」それが僕の名。

僕の機能は機動した日の日記を付けること。そして、僕の眼には僕に対して友好関係にあるヒトは黄色い枠で囲まれて見ることができ、逆に敵対を持ったヒトには赤い枠で囲まれてるのを見ることができ
る。

僕はとあるロボット研究所のT博士というヒトに作られた。

T博士が言うには僕を多くのヒトに見せるらしい。

2XX0年4／7

今日、僕は多くのヒトに見せることになった。

T博士は僕に布を被せ、何かの乗り物に乗せられた。

どうやら研究所で見せるのではないらしい。

僕は運ばれて数時間、やっと到着した。そこでは色々な言葉が聞こえた。

僕にかかっていた布をはずさせると、ヒトの歓声が沸く。

そこで見たのはとてもとても多い数の黄色い枠で囲まれたヒト。

研究所にいたヒトはせいぜい10人ほど、しかしそこには1000人近いヒトがいた。

しかも全員黄色。僕は少し嬉しくなった。しばらくT博士は何かの説明をしている。しかし、僕には会話機能は備わっていない。この人たちが何を言っているのか分らなかった。

2XX0年7／4

僕が生まれて3ヶ月。あれから僕は研究所に戻った。ほぼ毎日大勢

のヒトが僕を見学に来る。大人はもちろん子供たちも僕を見に来る。でも、時たまに僕は赤い枠のヒトたちを見かける。そして、何かこっさり僕はじっと見つめる。その眼は何か怖かった。

2XX0年7／15

最近T博士を見なくなった。通信で状況を知らせてもらうと、T博士は何者かに殺されたらしい。引き続き僕の研究はその助手たちにやってもらおうそうだ。

見学のヒトたちは子供ばかりになってきている。みんな黄色い枠だ。でも、また赤い枠の大人たちも見かける。

2XX0年8／6

最近、子供たちも赤い枠になりはじめている。まただんだんと見学の数も少なくなった。

それだけじゃなく、たまに僕をイタズラしたり、壊そうとする子たちもいる。

助手の人たちがそれを見て、一生懸命とめてくれる。

2XX0年9／1

僕はいよいよ身体を手に入れられるそうだ。これを付ければ僕は自由に動けるようになるらしい。楽しみだ。最近は助手のヒトたちしか黄色い枠はいない。

2XX0年9／5

深夜、僕は急に目覚めた。身体が急に痛くなった。機動すると、目の前には大勢の赤い枠のヒトたちがいた。何か道具を持っていて、僕は壊そうとする。僕は一生懸命、それを防いで手を払ったりした。それでも赤い枠のヒトたちは消えなかったが、壊そうするのはやめてくれた。

2XX0年9／7

おとといのこともあったから、助手のヒトたちにも何人か、赤い杵を見るようになった。

たまに僕におびえた眼をする。僕は仲良くしたいのに、なぜ嫌られるんだろう。

2XX0年11／10

最近では外に出されるようになった。初めて外を歩く。いつもは研究所内だったけど、まったく違う世界だった。そして、今日久々に僕を見に来た黄色い杵の子供が1人きた。

今日は嬉しい日だ。

2XX0年11／20

僕は初めて会話機能を付けてもらえるようになった。これでヒトたちの言葉もわかる。

あの子供とも話せるかな。

2XX0年11／21

僕が話せるとわかると、あの子供はすごくうれしそうにしていた。だけど、僕はあの子供がヒトをいっぱいやつつけちゃえという言葉は理解できなかった。僕は仲良くしたいのに。

2XX0年12／24

今年ももうすぐ終わる。外ではクリスマスというのだそうだ。それでもあの子供は着てくれた。でも、いつもあの子は傷だらけで来る。わけを聞くと悪いヒトがするそうだ。

許せなかった。

2XX0年12／25

外では子供にプレゼントをあげる日だそうだ。では、僕も何かあの

子に上げようと思う。

よく考え、モノじゃなく、悪いヒトたちをやっつけることをプレゼントにした。

2XX0年12／26

あの子がよろこんでくれると思っていた。だけど、その子は泣いていた。

そして、赤い粹になった。理解できなかった。そして、僕をこわそうとする。

僕はやめさせた。でも、赤い粹は消えない。

2XX1年1／15

助手のヒトたちも赤い粹になっていくのが多かった。中には突然いなくなるヒトもいる。

でも、新しく多くのヒトがきた。どうやら僕を新しく世話してくれるヒトが見つかったらしい。久々に見る黄色い粹のヒト。僕は嬉しい。

2XX1年3／20

新しいヒトたちは僕と似たのをたくさん作っている。

僕はたまに身体を分解されては戻された。理解ができない。それでも黄色い粹だった。別にかまわなかった。

2XX1年4／1

僕が生まれて、もうすぐ1年が立つ。そして、僕には多くの兄弟ができた。

しかし、新しいヒトは僕の記憶を消去するといった。

僕は断った。すると、見る見るうちに黄色は赤色になる。

僕は逃げた。

2XX1年4／2

街のニュースで今世界は多くの戦争をしていた。

その中で、武器に使っているのは私の仲間だった。

僕の存在を理解した。街中で自分がロボットだとわかった、赤い枠のヒトたちが大勢きた。

僕は逃げ続ける。

2XX1年4／3

僕は隠れながら、ニュースを見ていた。そして、あの新しいヒトたちがTVに出てきた。

どうやら、ロボットを売っているヒトたちらしい。

そう、悪いヒトはやつつけないよね。

2XX1年4／4

僕の誕生日。僕は研究所に戻り、兄弟たちを壊していった。

新しいヒトたちもやつつけていった。

それを聞きつけて、赤い枠のヒトたちも大勢研究所に駆けつける。

火が放たれ、研究所は燃えている。

今、僕自身をヒトから見れば赤い枠なんだろう。

僕の名はイースター。また次復活するまで、黄色い枠のヒトたちがいっぱいなのを願う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5387h/>

イースター

2010年10月25日20時03分発行